明治大正期愛知県下織物生産の統計的分析

中島　茂

Statistical Analysis of Textile Industry in
Aichi Prefecture between the Meiji and Taisho Eras

Shigeru NAKAJIMA

1．はじめに

戦前期にあって日本の近代工業の発展を主導した部門が繊維工業であったことは言を俟たない。筆者はこれまでに大阪府を中心に明治大正期の綿織物工業の近代化と産地形成の状況を検討してきた[1)]。これは明治後期から大正期にかけて、大阪府が全国最大の綿織物生産地であったことを捉えたものであった。と同時に、当時大阪府と並ぶ２大産地のもう一方が愛知県であったため、愛知県についてもごく概略であるが、綿織物生産状況に検討を加えた[2)]。しかし、そこでの分析は綿織物に限定したものであったし、時期的にも限られたものであったため、その踏み込んだ検討は残された課題のままであった。

近現代にあって、日本の二大繊維産地を擁した大阪府と愛知県について、それぞれを詳しく分析することは、単に特定の限られた地域事例を紹介するというだけにとどまらない、我が国の繊維工業地域の成り立ちを明らかにするうえで重要な課題である。そこで本稿では、前稿で中途半端な検討に終わっていた明治大正期における愛知県の織物生産状況を、統計的に詳細に分析し、とくにその県内における地域的な特性を明らかにして、織物工業地域形成の研究を一層深化させる一環としたい。

明治大正期の織物生産状況を示す統計資料は、道府県別全国値については、1884（明治17）年に始まる『農商務統計表』[3)]が毎年出されているが、各府県内の郡市別資料については、それぞれの府県でほぼ毎年刊行されている「府県統計書」もしくは「府県勧業年報」によるほか、経年変化を追うすべがない。本稿では『愛知県統計書』および『愛知県勧業年報』を主たる資料として利用しながら、愛知県内の郡市別織物生産動向を分析するが、以下では、まずこれらの統計資料の記載内容について検討し、その具体的内容と利用上の課題を明ら

かにしておきたい。なお、『農商務統計表』や全国の「府県統計書」、「府県勧業年報」における産業経済統計の調査様式の基準となった「農商務統計様式」等の内容と変遷については、松田芳郎編（1980）を参照されたい[4]。

2．明治大正期愛知県における経済統計について

（1）愛知県における統計書類の刊行状況

愛知県における統計書の刊行は、1877（明治10）年の『愛知県統計書』が利用できる最も古いもので、それ以前については所在が確認できていない。府県によってはそれ以前に、「統計概表」、「府県治一斑」などの名称で、冊子もしくは一枚物の形での統計表が出版されているところもあるが、現在、愛知県ではそうした古い記録は見当たらない。「県統計書」は各県の内務部もしくはこれに相当する部局で編纂されたものであるが、これとは別に勧業部など、中央政府では農商務省が管轄する産業経済振興の担当部局が刊行した資料に「勧業年報」などの名称をもつ統計書がある。愛知県では最初のものが1878（明治11）年に刊行されたとされているが、現在その所在は不明である[5]。現在確認できる『愛知県勧業年報』は1895（明治28）年が最も古く[6]、1906（明治39）年まで毎年刊行されているが、1907年以降は『愛知県統計書』に統合されたものとみられる[7]。

ところが、愛知県ではこの現存する1895年以降の『愛知県勧業年報』が刊行されている間に、『愛知県統計書』は刊行されていなかったとみられる。同書は1891（明治24）年版まではほぼ毎年刊行されてきたとみられるが、1892年、93年版が『明治二十五年明治二十六年愛知県統計書（全）』の合併版、翌84年、85年版も同じく2年度合併版として刊行された後、1907（明治40）年版が出されるまでの間、中断していたようである。その間は、『県統計書』に替わって『愛知県治一班』が1895年版の第1回から1906年版の第9回まで刊行されているものの[8]、『愛知県治一班』には特に同書刊行の経緯についての説明がなく、内容的にはほぼ『県統計書』を踏襲している。本稿では基本的には刊行年次の継続する『愛知県統計書』と『愛知県勧業年報』を利用して、愛知県内の織物

生産状況を把握する。

（2）『愛知県統計書』と『愛知県勧業年報』にみる織物の記載内容

『愛知県統計書』にみる織物生産統計は、1877年版と79年版に物産を提示する第3門「特有物産」の項目に、織物品目名とその製造数量が挙げられているのが始まりである。ちなみに79年の記載品目は、白木綿、綿フラネル（筆者補注：綿フランネル）、佐々飛白、結城縞、絞木綿、縞木綿、木綿小倉織、白紋羽、緞通、絹織物、足袋織底、襟巻の12品目であるが、絞木綿は織物よりも染色に含めるべきであろうし、綿製品と絹製品の区別も明瞭ではない。数量は白木綿の1,351,457反、絞木綿の813,016反、縞木綿の372,956反、結城縞の222,794反などが主なものである。これらの数字が当時の県内織物生産のどの程度を捕捉したものかはわからない。しかし、この後しばらくは織物関係の記載がなく、次に織物生産関係の統計が記載されるのは、1884（明治17）年からで、この年次以降は内容の精粗はあるものの、織物生産統計が記載されるようになる。

1884年の記載内容は、織物の品目別区分はなく、郡市別の織物製造高と製造人員が示されるのみで、記載をみない郡も多く、どの程度の捕捉が行われたのか明らかではない。翌85年以降になると、生地素材別（以下、特に断りのない限り種類別と表記する）織物生産数量と生産価額が郡市別に記載されるようになる。分類は絹織物、絹綿交織物、絹麻交織物、木綿織物、綿麻交織物、麻織物、雑織物の種類別7区分であるが、まだ各種類ごとの詳しい品目別（以下、羽二重、白木綿など各種類ごとの織物品目を指す）統計には至っていない。この区分は1889年以降、絹織物、絹綿交織物、木綿織物、絹麻及綿麻交織物、麻織物、雑織物に整理され、さらに1894年以降は絹織物、絹綿交織物、木綿織物、麻織物及其交織物、雑織物に統合整理されている。『愛知県統計書』において各種類ごとの詳しい品目別統計が登場するのは、1895（明治28）年版からで、これは県総数のみであり、郡市別には示されていない。こののち、『愛知県統計書』の刊行は中断し、1907（明治40）年版からの再開以降は郡市別数値として利用できるようになる。

品目別で愛知県の項目記載の特性をみると、綿織物に関して1908（明治41）

年から「岡木綿」の項目が挙げられ、「白木綿」と並んで大正中期まで継続している。「岡木綿」は真岡木綿を倣ったものとされ、広義には白木綿に含めてもよいだろう。実際に1915（大正４）年以降の綿織物の品目分類では、小幅白綿布類の分類が「岡木綿」と「其他白木綿」の２項目に整理されている。

さらに品目統計と並んで織物生産状況を明らかにする機業戸数統計（職戸数、織機台数、職工数などを示す統計）については、『愛知県統計書』では1886（明治19）年から「著名製造物品」の項目が掲載され、そこに製造主と職工の数が記載されるようになるが、「織物」がその一項目として取り上げられ、前年85年の数値が併記されている。ただし、製造主、職工が具体的にどのような様態の製造場に属するものを指しているのかは明らかでない。しかし、この項目も87年までで３カ年分しか記載がなく、本格的な機業戸数統計が登場するのは、1894（明治27）年以降のことである。1883（明治16）年に出された農商務省の「農商務通信規則」では、織物生産に関して「製造家数」、「工員数」、「機数」の項目が挙げられていたものが、86年の「農商務通信事項統計様式」では機業戸数統計が省かれ、94年の「農商務統計様式」で復活するまでの間は、機業戸数が統計的に掌握できない状況にあった。『愛知県統計書』では1880年代の記載内容が農商務省の様式とはずれるものの、1894年以降に機業戸数統計が登場する点は農商務省の様式に対応している。1907（明治40）年以降は、ほぼ「農商務統計様式」に沿った分類や記載が行われるが、大正期に入って、1915（大正４）年～1921（大正10）年の間は愛知県の独自集計として、織機数欄に「足踏機」の項目がたてられている。

つぎに、1895年から利用できる『愛知県勧業年報』の記載内容をみておこう。同書の記載内容は、基本的には従前の『愛知県統計書』を踏襲しており、織物生産統計に関しては、種類別の生産数量および価額が郡市別に示されている。各種類ごとの品目別統計は1899（明治32）年からの３年間に、名古屋市など一部の郡市のみ記載されるにとどまり、尾張、三河の国別集計もないため、県内の地域的展開状況を十分には把握できない。また、同年からは「農商務統計様式」の改訂に合わせて、毛織物が種類別項目としてあげられ、のちの『愛知県統計書』へ引き継がれていく。なお、1902（明治35）年からは、新しい品目と

して「綿毛布」と「機械織広幅綿布」が、翌03年からは「タオル」が項目として付け加えられる。これらは農商務省の「織物指定特別調査」の品目としてあげられたもので、本来は綿織物の中に含められるべきものであるが、『愛知県統計書』に引き継がれた後も、1914（大正３）年までは綿織物とは別立てで記載されているため、集計上注意が必要である。

機業戸数統計に関しては、農商務省の「農商務統計様式」の1904（明治37）年の改訂に合わせて、同年から生産形態別（工場、家内工業、織元、賃織業の４形態）戸数、織機数（力織機・手織機別）、職工数（男女別）が郡市別に掲載され、1907年からの『愛知県統計書』へ引き継がれる。

以上、明治期から大正期にかけての『愛知県統計書』ならびに『愛知県勧業年報』を取り上げて、その記載内容とその変遷についてみてきたが、これら以外にも『愛知県治一班』が『愛知県勧業年報』とほぼ並行して刊行されているものの、その記載内容は上記二つの資料を踏襲したものであり、ここでは説明を省略する。愛知県における織物生産状況を地域的に詳しく検討する上では、これらの資料による郡市別の把握が必須であるが、1889年から1894年にかけて、つまり明治20年代中葉の時期には郡市別記載が省略され、さらに各種類ごとの品目別織物生産統計についても、郡市別には1907年以降でしか記載がない。これらは全体としてみると、農商務省による1889（明治22）年の「農商務通信事項統計様式」の発令、1894（明治27）年および1899（明治32）年の「農商務統計様式」の発令により、織物品目の細分化、詳細化が進むなかにあって、愛知県での当初の統計業務がその変化に追いついていなかったこと、あるいは、地域的な記載も明治20年代から30年代にかけての時期に簡略化され、十分な統計的情報提供が実施されていなかったことを示している。1895年からの『愛知県勧業年報』や『愛知県治一班』は判型が小さく、文庫版程度の大きさにとどまっており、当然盛り込まれる情報量は限定せざるをえない。そうした状況は当時の愛知県の財政事情や地方行政担当者による統計業務の重要性への理解度など、種々の要因が作用していると思われる。

以下では、これらの資料により、上記問題点を考慮しながら、明治大正期の愛知県における織物生産状況を統計的に検討する。

3．明治大正期愛知県における織物生産動向

まず、明治大正期の時系列的な織物生産動向を追う前に、この時期の織物生産のピークであった1919（大正８）年における愛知県の全郡市別機業戸数、織物種類別生産額を第１表にみておこう。この表では、原表の機業戸数統計が毛織物とそれ以外の絹・絹綿・綿織物などを分けて、別掲載されているものを集計して示している。県全体の機業戸数は２万戸を超えるが、その大部分が尾張地方に集中し、戸数でみれば、名古屋市と中島郡が5,000戸台で突出しており、丹羽郡の3,442戸、葉栗郡の2,294戸がこれに続いている。しかし、生産能力を最もよく示すとみられる織機台数では名古屋市の２万台弱に次いで、知多郡の

第１表　愛知県の郡市別織物生産状況（1919年）

	機業戸数	うち工場数	織機台数	職工数	合計
愛知県	20,639	755	73,198	77,741	242,133,254
尾張	19,233	593	65,165	70,101	209,737,805
三河	1,406	162	8,033	7,640	32,395,449
名古屋市	5,868	225	19,897	23,105	49,406,694
愛知郡	526	50	5,110	9,054	20,354,575
東春日井郡	11	5	327	442	1,288,029
西春日井郡	103	16	2,163	2,711	8,591,497
丹羽郡	3,442	39	4,804	5,006	6,228,759
葉栗郡	2,294	19	3,169	3,591	6,414,743
中島郡	5,618	134	12,432	12,276	41,783,678
海部郡	1,085	82	4,432	4,625	25,028,615
知多郡	286	23	12,831	9,291	50,641,215
豊橋市	38	2	204	167	1,225,978
岡崎市	49	18	1,223	1,253	6,261,427
碧海郡	52	21	1,038	830	5,780,842
幡豆郡	115	38	1,821	1,695	4,993,202
額田郡	72	28	1,290	1,433	6,187,011
西加茂郡	−	−	−	−	−
東加茂郡	425	4	490	496	149,710
北設楽郡	51	−	51	52	5,844
南設楽郡	1	−	2	2	1,296
宝飯郡	553	50	1,817	1,632	7,669,306
渥美郡	45	1	92	75	117,213
八名郡	5	−	5	5	3,620

注）単位は（戸）、（台）、（人）、（円）。その他には麻織物、雑織物、緞通・地氈を含む。
資料）『愛知県統計書』より

（八九）

12,831台と中島郡の12,432台が次ぎ、他郡市を大きく上回っている。職工数でも似通った傾向を示すが、知多郡の割合が低下する一方、愛知郡が知多郡に並ぶ数を示している。織機台数が職工数を上回るのは尾張地方では知多郡と中島郡のみで、とくに知多郡での労働生産性が県内では高いことがわかるが、同年の大阪府の数字をみると、戸数1,910戸、織機台数51,639台、職工数46,331人で、各指標とも愛知県より少なく、とくに戸数は1割以下に過ぎない。しかし、織機台数は職工数を上回り、大部分が「工場」生産に移行しており、織物生産額では、愛知県の2.4億円を上回る3億円超を示し、工場を中心とした高い生産性に基づく織物生産状況に達していた。

織物生産額では知多郡の5,064万円と名古屋市の4,941万円が大きく、これに

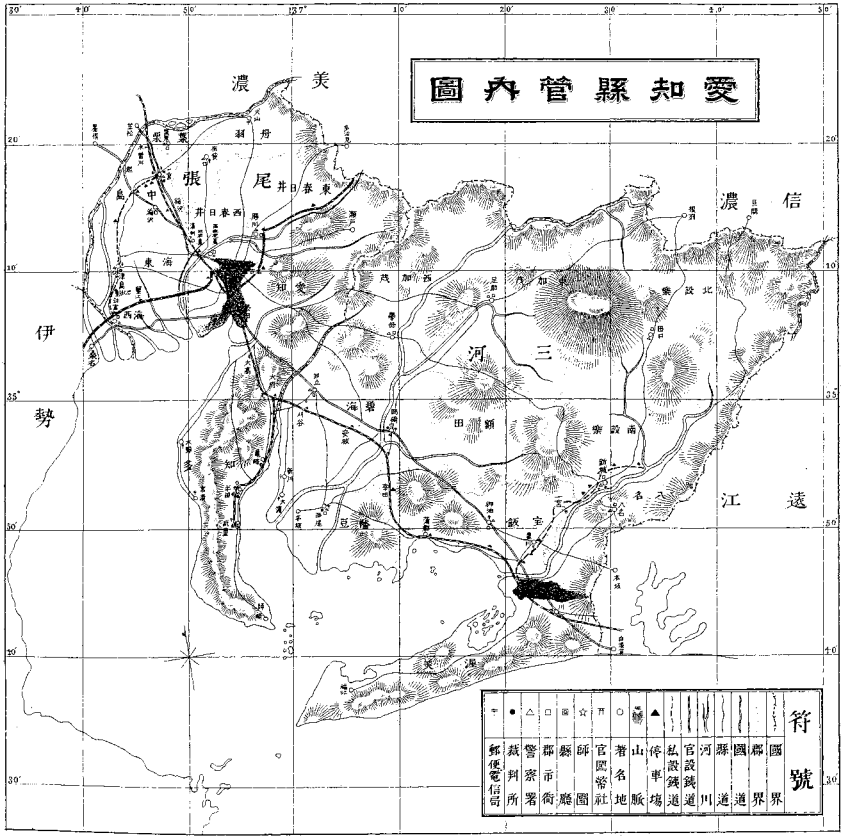
織物生産額				
絹織物	絹綿交織物	綿織物	毛織物	その他
9,422,566	22,887,690	163,172,949	45,428,991	1,221,058
9,349,979	22,884,449	131,231,559	45,429,042	842,827
72,587	3,241	31,941,390	−	378,231
5,176,323	4,630,706	34,802,343	4,236,264	561,058
364,003	1,287,901	17,957,629	739,042	6,000
−	27,138	1,260,891	−	−
1,705,390	481,054	3,416,860	2,949,715	38,478
1,118,901	171,445	4,918,323	−	20,090
466,277	3,970,294	1,695,257	104,214	178,701
498,812	11,847,954	12,869,203	16,529,260	38,500
20,273	467,957	4,076,038	20,464,347	−
−	−	50,235,015	406,200	−
36,838	150	1,188,990	−	−
420	346	6,260,661	−	−
−	−	5,780,842	−	−
−	−	4,993,202	−	−
5,400	−	6,181,611	−	−
−	−	−	−	−
1,140	−	148,570	−	−
2,963	595	2,286	−	−
1,296	−	−	−	−
2,385	−	7,288,690	−	378,231
22,145	2,090	92,978	−	−
−	60	3,560	−	−

中島郡の4,178万円が続いている。さらに海部郡、愛知郡が2,000万円台で続くが、三河を含めて、このほかの主な郡市は、西春日井、葉栗、丹羽、宝飯、岡崎市、額田、碧海、幡豆などである。種類別では、全体とすれば綿織物が圧倒的であるが、名古屋市や愛知郡、とりわけ知多郡で綿織物生産が他を圧倒するものの、名古屋市の場合は絹織物、絹綿交織物、毛織物などがそれぞれ相当量生産されている。また、中島郡や海部郡では毛織物が最大品目で、前者では綿、絹綿も毛織物に匹敵するほどの生産額を示しており、葉栗郡では絹綿交織物が最大品目である。三河地方は綿織物がほぼ中心となっているが、三河高原など山間地に位置する東・西加茂、南・北設楽、八名などの諸郡では織物生産があまり盛んではない。なお、尾張地方でも愛知、東・西春日井郡のように、名古屋近郊で大規模な工場の出現によって、急激に生産額を高めた地域と尾張西部の在来織物産地とでは、機業戸数に大きな違いがある。

こうした状況を踏まえて、以下では尾張地方の名古屋市と丹羽、葉栗、中島、海部、知多５郡、三河地方では岡崎市を含めた額田[9]、碧海、幡豆、宝飯４郡を中心に取り上げ、その動向をみていきたい。なお、各郡市の位置については『明治四十二年愛知県統計書』の付図を第１図に示した。

（１）機業戸数統計の分析

全国の主要機業地の類型化を試みた神立春樹（1974）は、愛知県を大阪府などと並ぶ「第一の類型」に含め、江戸期以来の在来機業地を有しつつも、大規模な紡績資本による兼営織布が卓越した地域類型に当たるとしている[10]。そして、明治大正期において愛知県内の中島郡に代表される在来織物産地の停滞と、名古屋市、知多郡といった新興の工場生産地域の台頭を指摘している[11]。また、拙著（2001）では明治末から大正中期にかけての全国的に織物生産が急増した時期に、在来綿織物産地での織物生産の工場生産化が大阪や愛知で急展開するものの、愛知県の工場生産の展開や力織機化の展開が、大阪府との比較ではやや遅れていたことを指摘した[12]。ただし、大阪府の織物生産が綿織物と一部地域での毛織物生産に特化していたのに対して、愛知県では綿織物生産がこの時期に急増するものの、在来の絹織物や絹綿交織物生産が大きな意味を有し、さ



第１図　愛知県管内図（『明治四十二年愛知県統計書』付図）

資料）『愛知県統計書』（明治42年版）より（なお、原図は彩色図で60%に縮小した。）

らに東京や大阪と比べるとやや遅れて展開するものの、毛織物生産がこの時期に急増して、多様な織物生産が展開している。ここではその詳細で具体的な状況をみていくが、まずは織物生産力を示す機業戸数統計の検討から始めよう。

a）絹・絹綿・綿・麻織物

『愛知県統計書』類（『愛知県勧業年報』を含める〔以下同様〕）で系統的に機業戸数が掲載されるのは、1894（明治27）年以降であり、織物生産が戦前期の頂点に達する1919（大正８）年までを５年ごとの状況で、県内の主要郡市に

ついてみてみよう（第２表）。愛知県全体の動向をみると、1894年の機業戸数35,726戸から、年によって比較的大きな増減の変動はあるものの、1899（明治32）年以降の数年間１万戸台に減少した後、1904（明治37）年の前年から旧に復し、04年には48,251戸と明治大正期の最大数に達している。その後総戸数は漸減し、1915（大正４）年には14,136戸まで減少した後、微増して大正中期には２万戸余を数えている。1904年以降の生産形態別戸数でみると、この変動は基本的には１万～４万戸を占める「賃織業」の戸数変動を示している。「工場」は1904年以降数年間は300～400戸前後、1909年以降は500～700戸の間で推移している。「家内工業」（1915年以降は「職工数十人未満ノモノ」）は明治期に2,000

第２表　愛知県の主要郡市別機業統計（毛織物・敷物類を除く）

年次	全県						尾張地域		
	戸数	機数	力織機	比率	職工数	平均	戸数	機数	力織機
1894年	35,726	60,243	…	…	62,227	1.7	…	…	…
1899年	15,738	70,311	…	…	77,928	5.0	8,195	42,781	…
1904年	48,251	69,578	1,489	2.1	58,408	1.2	36,250	51,447	1,260
1909年	30,635	59,387	8,951	15.1	56,330	1.8	26,212	46,393	6,743
1914年	15,520	46,717	16,644	35.6	42,671	2.7	14,250	40,470	12,874
1919年	20,243	66,932	32,044	47.9	71,020	3.5	18,837	58,899	26,436
	丹羽郡						葉栗郡		
1894年	…	…	…	…	…	…	955	3,434	…
1899年	522	3,469	…	…	3,551	6.8	1,880	3,982	…
1904年	7,716	9,660	－	－	8,072	1.0	2,115	4,371	66
1909年	4,191	5,573	1,155	20.7	5,144	1.2	2,620	3,980	50
1914年	1,439	4,935	2,429	49.2	3,733	2.6	2,723	3,463	2
1919年	3,442	4,804	957	19.9	5,006	1.5	2,291	3,121	212
	海部郡						知多郡		
1894年	…	…	…	…	…	…	8,071	10,402	…
1899年	646	3,274	…	…	3,214	5.0	3,537	11,643	…
1904年	1,484	3,104	－	－	2,614	1.8	17,045	19,868	592
1909年	3,058	5,348	470	8.8	4,126	1.3	4,696	9,091	3,305
1914年	832	1,325	232	17.5	1,437	1.7	185	5,907	5,865
1919年	826	1,623	417	25.7	1,545	1.9	284	12,799	12,634
	幡豆郡						額田郡		
1894年	…	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	*5,279*	*6,537*	…	…	*7,041*	*1.3*	599	10,085	…
1904年	1,580	3,027	55	1.8	2,105	1.3	3,851	6,269	69
1909年	529	5,513	574	10.4	5,605	10.6	316	951	294
1914年	417	1,341	654	48.8	875	2.1	124	1,928	1,624
1919年	115	1,821	1,375	75.5	1,695	14.7	121	2,513	2,136

注）単位は戸数（戸）、機数（台）、職工数（人）、力織機は機数の内数（台）。比率は力織機比率（％）、平均は平均職工数（人）を示す。…は資料なし。対象は絹・絹綿・綿・麻・雑織物生産者。
当該年の数値に疑問があるため、碧海郡の1904年欄は1903年値、幡豆郡の1899年欄は1898年値を掲げた。額田郡の1919年値には1916年に市制施行した岡崎市を含む。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より作成。

～3,000戸台で推移したものが、大正期に入るといったん900戸前後まで減少し、大正中期には再び増加している。「織元」は明治期には1,000戸台であったが、大正期には500～700戸前後まで減少し、その動向は賃織業の増減とほぼ対応している。

織機台数をみると、1894年～1907年にかけては６万～８万台を数えたが、その後漸減し、1915年に4.2万台で底を打った後、大正中期にかけては７万台前後まで回復している。『愛知県統計書』では生産形態別統計の統計様式が始まる1904年から生産形態ごとの数値を掲載し始めるが、1916（大正５）年まででその掲載を打ち切り、それ以降は戸数のみを形態別にあげて、機数、職工数に

			名古屋市					
比率	職工数	平均	戸数	機数	力織機	比率	職工数	平均
…	…	…	133	1,612	…	…	1,514	11.4
…	44,829	5.5	172	3,499	…	…	3,584	20.8
2.4	44,971	1.2	310	2,786	422	15.1	3,239	10.4
14.5	43,432	1.7	4,033	9,043	1,174	13.0	10,017	2.5
31.8	37,464	2.6	4,490	11,220	1,620	14.4	10,630	2.4
44.9	63,380	3.4	5,810	18,428	5,587	30.3	21,693	3.7
			中島郡					
…	3,529	3.7	2,357	14,904	…	…	17,610	7.5
…	5,018	2.7	1,417	16,672	…	…	18,096	12.8
1.5	3,285	1.6	6,288	9,966	－	－	10,164	1.6
1.3	4,793	1.8	6,327	9,951	185	1.9	9,876	1.6
0.1	3,786	1.4	3,833	10,573	955	9.0	12,875	3.4
6.8	3,502	1.5	5,572	11,117	1,521	13.7	10,927	2.0
			碧海郡					
…	8,566	1.1	…	…	…	…	…	…
…	11,010	3.1	4,537	4,056	…	…	7,497	1.7
3.0	16,213	1.0	*3,068*	*3,680*	…	…	*3,246*	*1.1*
36.4	6,518	1.4	2,521	4,526	639	14.1	4,291	1.7
99.3	3,067	16.6	141	1,283	920	71.7	1,030	7.3
98.7	9,245	32.6	52	1,038	866	83.4	830	16.0
			宝飯郡					
…	…	…	…	…	…	…	…	…
…	13,825	23.1	2,238	3,630	…	…	3,909	1.7
1.1	6,269	1.6	2,489	3,647	－	－	3,423	1.4
30.9	1,159	3.7	288	673	184	27.3	788	2.7
84.2	1,284	10.4	235	1,059	199	18.8	1,586	6.7
85.0	2,686	22.2	553	1,817	979	53.9	1,632	3.0

ついては形態別数値を省略している。形態別の判明する1904年～16年の12年間に工場での織機台数増加と賃織業での減少傾向が認められ、家内工業や織元では戸数同様、大正期に入ると減少している。力織機は統計に記載の始まる1904年時点で1,500台弱が導入されており、以降年による小さな増減はあるが、ほぼ一貫して増加を続け、力織機化率も上昇して、大正中期には50%前後に達している。しかし、これは大阪府などと比べて普及率がまだかなり低い水準にとどまっている。これは以下で詳しくみるように、名古屋市をはじめ県内で織物生産の中心をなす尾張地方での力織機化が、知多郡を除いて低い水準にとどまっていることが反映した結果である。

なお、『愛知県統計書』に1915年～21年のみ記載をみる「足踏機」をみておくと、表には1919年値のみを掲げたが（第３表）、全県で1915年の1,459台からじょじょに増加し、1917年に2,374台、1919年には最大の3,570台に達した後、減少して1921年には3,515台となっている。例えば、1919年には手織機、力織機ともそれぞれ３万台を超えているため、足踏機の占める割合は数%に過ぎない。ほぼ県下各郡市でみられるが、特徴的な点は中島郡での導入が進んでいることで、同郡のみで1919年には1,565台を数え、このほか、海部郡、丹羽郡、名古屋市などで160～260台程度を、三河地方では岡崎市、幡豆郡、宝飯郡で270～400台を数えている。知多郡での導入台数は数十台と少なく、また、毛織物生産での足踏機の導入はみられない。

職工数は全体とすれば、ほぼ織機台数と同様の推移を示し、明治末～大正初期（1910～1916年）には４万人前後まで減少するが、1895年の8.6万人を頂点に５万～７万人台で推移している。生産形態別では1916年までの状況でみて、工場職工数の増加と賃織

第３表　愛知県の郡市別足踏機台数（1919年）

郡市名	台数	郡市名	台数
愛知県	3,570	三河	1,171
尾張	2,399	豊橋市	24
名古屋市	164	岡崎市	269
愛知郡	32	碧海郡	76
西春日井郡	128	幡豆郡	408
丹羽郡	186	額田郡	15
葉栗郡	39	北設楽郡	1
中島郡	1,565	南設楽郡	2
海部郡	269	宝飯郡	369
知多郡	16	渥美郡	6
		八名郡	1

注）単位は（台）。東春日井、西加茂、東加茂３郡は皆無のため省略。
資料）『愛知県統計書』より

業職工数の減少傾向が明瞭で、職工総数の４万人前後に停滞する明治末から大正初期の時期に工場が賃織業のそれを上回るようになっている。１戸当たり平均職工数は、1899年値は前後の年に比べて戸数が著しく少ないのに、織機数や職工数はあまり減少していないため、平均値が突出して大きいが、県全体の傾向としては、明治後期から大正中期にかけてじょじょに拡大する傾向にあり、工場の増加と賃織業の減少という動向に対応している。ちなみに1914年の生産形態別数値を上げると、工場が34.0人、家内工業が3.1人、織元が3.1人、賃織業が1.4人で、賃織業の絶対数の多さが平均値を引き下げていることがわかる。

これらの県内における地域的傾向を知るために主要郡市についてみてみよう。大まかな地域的傾向として、明治後期以降の状況をみれば、織物生産の大半は尾張地方の側に集中し、三河地方の占める割合は縮小する傾向にある。

まず、尾張地方からみていくと、1894年時点で織機数、職工数が県内最大の郡は中島郡であり、機業戸数2,357戸、14,904台、17,610人を数え、知多郡の8,071戸、10,402台、8,566人がこれに次いでいた。これに葉栗郡、名古屋市などが続き、名古屋市自体はそれほど目立った存在ではなかった。しかし、1909年には中島郡や知多郡が停滞的な中で、名古屋市での生産規模が急拡大しており、都市部での大規模工場生産の展開が反映している。さらに1919年では、名古屋市が県内最大の織機数、職工数を示し、これに織機数では知多郡が、職工数では中島郡が次ぐ形になっている。その他の葉栗郡や海部郡[13)]、丹羽郡などは生産規模があまり拡大せず、停滞した状況を読み取ることができる。とりわけ、知多郡では大正期に入る頃から力織機の普及が進み、1914年時点で全織機の99％が力織機によって占められている。これに対して、中島郡をはじめ、上述の諸郡では10％にも満たない郡から25％程度の力織機比率にとどまっており、名古屋市でもその比率は30％にとどまって、知多郡の突出振りがよくわかる。また、平均職工数規模では、知多郡が大正期に入って急速に拡大し、工場生産が展開している様子が見られるものの、他の郡市では、名古屋市を含めて、あまり顕著な平均規模の拡大がみられず、工場の展開よりも家内工業や賃織業の数の多さが顕著である。

これらに対して、三河地方では、織物生産が盛んな郡は碧海、幡豆、額田、

宝飯の４郡にとどまり、戸数、織機数、職工数とも特別多い郡はない上、全般的には減少傾向を示している。ただし、力織機化は尾張側よりも進展しており、力織機比率は1919年には８割前後、低い郡でも50％を超えている。また、平均職工数も宝飯郡を除けば、大正期に入って拡大し、数は少ないものの、力織機を備えた織物工場による生産が大きな割合を占めるようになっている。

ｂ）毛織物

毛織物に関する機業戸数統計が『愛知県統計書』類に記載され始めるのは、1905（明治38）年以降のことで、**第４表**では同年を起点とし、他の年次は前表に合わせている。05年の毛織物機業戸数は全県で５戸にとどまるが、職工数は200人を数え、「工場」での生産によっていたとみられる。しかし、この時点ではまだ力織機は導入されていなかったようである。統計上、力織機の導入は翌1906年からであるが、力織機化は必ずしも速いペースでは進まず、1919年時点でも県全体では24.5％の普及率にとどまっている。毛織物工場は三河地方にはほとんど展開せず、1906年と1917～18年に豊橋市や岡崎市に散発的に何戸か現れるが、ほとんど継続していない。尾張地方の場合も、東春日井、丹羽、葉栗、知多の諸郡では少数の展開にとどまるか、年次によって散発的に記載をみるにとどまっている。愛知、西春日井２郡では名古屋市近郊に毛織物工場が出現し、一定の生産規模を有するようになるが、地域的には名古屋市と一体の展開とみるべきものである[14)]。このため、ここでは全県数値と名古屋市、中島郡、海部

第４表　愛知県の主要郡市別毛織物機業統計

年次	全　県						名古屋市					
	戸数	機数	力織機	比率	職工数	平均	戸数	機数	力織機	比率	職工数	平均
1905年	5	148	－	－	200	40.0	2	25	－	－	25	12.5
1909年	42	806	62	7.7	1,132	27.0	11	216	－	－	206	18.7
1914年	86	1,850	202	10.9	2,600	30.2	14	550	50	9.1	680	48.6
1919年	396	6,266	1,537	24.5	6,721	17.0	58	1,469	452	30.8	1,412	24.3
	中島郡						海部郡					
1905年	1	70	－	－	73	73.0	1	23	－	－	57	57.0
1909年	5	231	－	－	231	46.2	1	160	－	－	177	177.0
1914年	28	624	50	8.0	973	34.8	19	338	20	5.9	454	23.9
1919年	46	1,315	592	45.0	1,349	29.3	259	2,809	183	6.5	3,080	11.9

注）標目、単位は前表参照。毛織物に関する機業統計は1904年以前は数値が得られない。
資料）前表に同じ。

郡のみを示している。

毛織物戸数は大正期に入って急速に増加し、年による増減はあるが、大正中期には300戸台を数えている。表に見る1914年の数値は前後の年に比べても少なく、大正期としては最小の数値であるが、生産形態別にみると、賃織業が激減したことによっている。工場は1907年の10戸前後からじょじょに増えて、1914年には62戸、1919年には138戸を数え、家内工業も同じ間に数戸から始まって、数十戸（1919年は92戸と急増している）をみている。織元も数戸から数十戸の幅で変動するが、明瞭な増加傾向を示すわけではない。賃織業は数戸から200戸前後と年によって大きく変動しており、1914年には15戸、19年には160戸を数えている。織機数、職工数はほぼ歩調を揃えながら増加し、大正中期には台数、人数とも5,000～6,000を数えている。家内工業や賃織業の増加によって、平均職工数規模は縮小傾向にある。

地域的な分布をみると、1919年には海部郡の259戸、2,809台、3,080人が最も多く、名古屋市の58戸、1,469台、1,412人と中島郡の46戸、1,315台、1,349人がこれに続いている。海部郡の戸数の突出した多さは賃織業の多さによっているが、名古屋市や中島郡では賃織業はほとんどみられない。ただ、中島郡では大正初期に100～200戸の賃織業が現れた時期があり、海部郡で賃織業の増加するのは1917年以降のことで、県全体の賃織業の数値が年によって大きく変動しているのはこうした２郡の動向が反映した結果である。海部郡では工場数も大正中期には50～60戸へ増加しており、名古屋市と中島郡がそれぞれ20～30戸にとどまることとは対照的である。家内工業も各郡市とも数十戸を数える。大正中期には平均職工数規模で賃織業の多い海部郡が12人弱と非常に小さく、名古屋市や中島郡の半分以下の規模となっている。力織機の導入も海部郡が最も低調で、６％程度にとどまるが、中島郡では45％、名古屋市でも30％に達している。賃織業はいうまでもなく、家内工業でもあまり力織機の導入が進んでいないため、全体としての動力化はかなり遅れている。この点は毛織物に限らず、知多郡を除く尾張地方に広く認められる傾向である。

以上のように、愛知県における機業戸数の動向は、全体としては尾張地方に織物生産が偏りながら進んでいたことを示している。そのなかで、濃尾平野の

中央に位置する尾張西部地域と名古屋市およびその周辺地域、知多郡という三つの異なる地域的傾向を示し、これに三河地方平野部の碧海、幡豆、額田、宝飯４郡が一つの地域的まとまりとして付け加わる構成となっていることがわかる。以下では、織物種類別、品目別の生産状況をみていこう。

（２）織物生産統計の分析

ここでは『愛知県統計書』において、織物生産統計が郡市別、種類別に網羅的に記載され始める1885（明治18）年以降を取り上げ、戦前期における全国織物生産の頂点に至る大正中期までの生産状況を分析する。まず、織物種類別分類での生産額をみた上で、各種類ごとに主要品目の主要郡市別の生産動向をみていく。

ａ）織物生産の全体的状況

大正中期の1919（大正８）年に織物生産は一つの頂点に達するため、この年を含む明治大正期の５年ごとの織物種類別生産動向をみていくが（第５表）、起点を1885年とし、織物品目別の詳細統計が掲載され始める1895年以降は、1899（明治32）年からの５年ごととし、大正末の1924年までを表示した。1885年の織物生産総額は53万円にとどまるが、生産規模の小ささだけでなく、統計的捕捉率の低さも反映していると思われる。地域的には尾張地方に生産が集中しており、県内の80％を占めるが、1890年代（明治20年代）は三河地方の比率がいったん高まるものの、その後は尾張地方へ生産が集中する傾向を示し、1924年には同地方が88％を占めている。

種類別にみると、愛知県の織物生産の中心は綿織物にあり、1885年値でみて織物全体の64％を占めている。この年次のみ「その他」に含まれる麻織物の比率が高いが、ほかの年次ではその他の比率はわずかに過ぎない。明治期にあっては、絹綿交織物が綿織物に次ぐ生産規模を有し、愛知県の織物生産を特徴付けている。1890年代には絹綿交織物の比率が高まり、1899年値では全体の27％を占めるに至るが、綿織物比率も６～７割を占め、むしろ明治末から大正期にかけて、じょじょに綿織物の占める割合が低下する傾向を示し、1919年には67％、24年には61％となっている。同様に絹綿交織物、絹織物とも金額自体は

伸びているものの、大正期にはその比率が低下するが、これらは1899年以降統計に表れる毛織物の生産拡大の結果である。毛織物は1899年にはわずか2,950円であったものが、1919年には4,543万円となり、大正後期には綿織物に次ぐ生産額へ急増している。地域的にみると、明治大正期の織物生産はほとんどが尾張地方に集中しており、綿織物でも尾張地方で明治期に6～7割を、大正期

第5表　愛知県の織物生産額

年次	愛知県合計					
	合計	絹織物	絹綿交織	綿織物	毛織物	その他
1885年	530,758	28,019	48,177	341,231	…	113,331
1890年	2,658,241	63,137	545,026	2,018,062	…	32,016
1895年	7,976,164	58,192	2,043,513	5,832,265	…	42,194
1899年	11,819,068	441,664	3,211,124	8,163,330	2,950	－
1904年	10,998,790	558,602	1,206,592	9,177,506	54,816	1,274
1909年	25,867,609	2,166,435	4,219,512	18,890,502	455,848	135,312
1914年	31,783,122	1,102,804	4,336,929	22,736,148	3,116,614	490,627
1919年	242,133,254	9,422,566	22,887,690	163,172,949	45,428,991	1,221,058
1924年	196,466,835	6,759,454	10,484,120	119,089,791	58,582,406	1,551,064
尾張地域						
1885年	423,927	27,669	47,984	235,108	…	113,166
1890年	…	…	…	…	…	…
1895年	5,743,508	54,612	2,018,199	3,641,964	…	28,733
1899年	8,230,886	439,389	3,114,432	4,666,755	2,950	－
1904年	9,286,362	489,453	1,191,684	7,549,835	54,816	574
1909年	21,088,412	2,141,526	4,133,566	14,342,242	455,848	15,230
1914年	26,862,285	1,041,586	4,312,581	17,900,877	3,116,614	490,627
1919年	209,737,805	9,349,979	22,884,449	131,231,559	45,429,042	842,827
1924年	172,600,167	6,684,339	10,479,255	95,669,721	58,554,295	1,212,557
三河地域						
1885年	104,542	350	193	103,834	…	165
1890年	…	…	…	…	…	…
1895年	2,232,656	3,580	25,314	2,190,301	…	13,461
1899年	3,565,542	2,275	66,692	3,496,575	－	－
1904年	1,712,428	69,149	14,908	1,627,671	－	700
1909年	4,779,197	24,909	85,946	4,548,260	－	120,082
1914年	4,920,837	61,218	24,348	4,835,271	－	－
1919年	32,395,449	72,587	3,241	31,941,390	－	378,231
1924年	23,866,668	75,115	4,865	23,420,070	28,111	338,507

注）単位は（円）。…は資料なし。1884年以前は資料なし。また、1888年～1894年は一部の郡市の数値しか記載されていないため、地域別集計値は資料なし。その他には麻織物、雑織物、敷物類を含む。
資料）各年の『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

には８割を占めている。さらに綿織物以外は尾張地方が９割以上を占めている。三河地方は「三河木綿」の産地として名を馳せたが、この時期生産量で尾張に遠く及ばず、しかも、織物生産の内容は実質的にほぼ綿織物のみに特化している。以下、種類別に詳しくみていこう。

ｂ）絹織物

『愛知県統計書』類では絹織物の品目として、1914（大正３）年までは紋織類、縮緬類、羽二重類、斜子類、糸織類、紬太織類、平絹類、絽類、傘地類、透綾類、海気類（1907年以前）、朱珍類（1908年以降）、袴地類、男帯地類、女帯地類、その他の16品目（年次によって記載のないものもある）が上げられ、さらに農商務省の「織物指定特別調査」による「輸出羽二重」（1918年まで継続）が別立てで上げられている。これが1915年以降は、縮緬、紋織、白絹類（小項目で紋羽二重、羽二重、その他に細分）、無地及縞着尺物類（小項目で糸織、紬及太織、絣、その他に細分）、無地及縞広幅物類、男帯地類、女帯地類、そ

第６表　愛知県の絹織物生産

年次	愛知県合計						
	合計	紋織類	縮緬類	白絹類	無地・縞類	帯地類	その他
1895年	58,192	736	4,388	16,343	12,179	4,558	19,988
1899年	441,664	22,744	13,890	318,264	22,330	4,769	59,667
1904年	705,019	77,038	－	468,443	2,359	9,267	147,912
1909年	2,166,435	87,481	8,180	1,065,737	120,305	109,846	774,886
1914年	1,144,578	553,296	48,515	46,111	362,611	38,293	95,752
1919年	9,422,566	267,165	2,813,199	1,415,768	4,619,567	106,477	200,390
	名古屋市						
1895年	…	…	…	…	…	…	…
1899年	60,841	－	－	－	20,230	3,689	36,922
1904年	…	…	…	…	…	…	…
1909年	896,637	－	－	360,288	46,475	102,550	387,324
1914年	360,530	－	－	－	296,916	31,956	31,658
1919年	5,176,323	－	1,206,000	27,102	3,790,570	103,426	49,225
	西春日井郡						
1895年	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…
1904年	…	…	…	…	…	…	…
1909年	330	－	66	264	－	－	－
1914年	9,320	－	7,320	－	2,000	－	－
1919年	1,705,390	－	1,543,870	－	75,000	－	86,520

注）単位は（円）。…は資料なし。白絹類には羽二重を含む。無地・縞類は無地縞着尺類の略。その他には輸出向け羽二重を含む。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

の他の８品目（小項目まで含めると13品目）に整理されている。愛知県の絹織物生産額は1919年の942万円が最大値であるが、織物生産全体に占める割合は数％にとどまり、県の中心的生産品目ではない（第６表）。しかし、この時期にはほぼ一定のシェアを占めながら、生産が行われていた。品目的には年次によってかなりの変動があり、傾向的には明治期が羽二重など白絹類の生産が多く、大正期には紋織や無地及縞類が多く生産されている。

つぎに地域別にみていくが、1895年～98年と1902年～06年は郡市別数値がなく、1899年～01年の間は名古屋市など２～３の主な郡市しか数値の記載がないため、詳細な検討が行えない点をまず指摘しておかなければならない。これは絹織物以外についても同様である。県内で絹織物生産が盛んな地域を郡市別にみると、1899年時点では葉栗郡が絹織物生産総額の32.9％を占めており、名古屋市は13.8％でこの２郡市でほぼ県内の半数を占めているが、中島郡は統計上では生産が行われていない。他の郡は表記がないためわからないが、少なくと

	丹羽郡						
	合計	紋織類	縮緬類	白絹類	無地・縞類	帯地類	その他
	…	…	…	…	…	…	…
	…	…	…	…	…	…	…
	…	…	…	…	…	…	…
	637,374	79,120	3,160	552,420	－	－	2,674
	497,121	463,805	3,410	6,084	15,479	－	8,343
	1,118,901	169,988	8,246	940,458	209	－	－
	葉栗郡						
	…	…	…	…	…	…	…
	145,489	22,744	7,890	91,105	2,100	－	21,650
	…	…	…	…	…	…	…
	514,259	7,580	－	134,400	－	－	372,279
	108,717	78,273	25,231	3,455	－	－	1,758
	466,277	78,474	13,739	374,064	－	－	－
	中島郡						
	…	…	…	…	…	…	…
	－	－	－	－	－	－	－
	…	…	…	…	…	…	…
	66,256	781	－	－	60,686	－	4,789
	12,538	－	－	－	3,834	－	8,704
	498,812	1,892	6,720	9,560	479,185	1,455	－

も丹羽郡ではかなりの生産が行われていたはずである。1909年では名古屋市が全県の41.4%を占めて最大で、丹羽郡が29.4%、葉栗郡が23.7%でこれに次いでいる。こののち大正期に入ると、傾向としては名古屋市への生産の集中が進み、1919年には同市が54.9%を占めて他郡を圧倒し、丹羽、葉栗両郡の比率は低下している。これに代わって西春日井郡や中島郡の比率が上昇し、郡部での生産状況に地域的な変動が生じている。

品目的には、明治期の名古屋市で1909年値として羽二重（白絹類）が多いものの、この年次のみの数値であるため、傾向としては同市では無地及縞類の糸織などの生産が盛んである。丹羽郡や葉栗郡では年次にもよるが、羽二重または紋織類が生産の主体をなしており、大正期に入って生産の急増する西春日井郡では生産のほとんどが縮緬に特化している。これらが年によって郡市ごとに変動するため、全体としてみると、県内で時期によって品目や地域が大きく変動してみえるのである。

c）絹綿交織物

1895年～1914年の『愛知県統計書』類に記載をみる絹綿交織物の品目名は、紋織類、繻子類(1899年以降)、二子其他糸入木綿類、袴地類、勾配海気類(1904年以降)、絹綿綾糸織（1888年以前)、男帯地類、女帯地類、その他の９品目、1915年以降は繻子、紋織、糸入縞類（小項目として、袴地、其他)、絣、男帯地類、女帯地類、その他の７品目である。絹綿交織物の生産額は1900年前後に300万円台を示した後、しばらくは100万円台で低迷し、1907（明治40）年頃からじょじょに増加して、大正中期の1919年にはこの時期最高の2,288万円に達している（第７表)。品目別にみると、生産の主体は二子其他糸入木綿を中心とした糸入縞類で、袴地もこの中に含まれている。表中の「その他」は原表のその他の項目に標記以外の品目をまとめてあるが、1919年値では絣が半分近くを占めている。繻子は1919年と翌20年が突出して多いが、明治末から大正期にかけては毎年20～30万円程度である。縞生地は、先染めした糸を織り込んで柄や色合いを生み出すもので、愛知県の在来織物の基本をなしているが、絹綿交織物にはその特性がよく反映している。

県内の生産地域をみると、尾張が大部分を占めるが、なかでも中島郡がその

生産の中心をなしており、愛知県の過半は同郡での生産に拠っている。このほか、名古屋市、葉栗郡などが主な産地で、いずれの郡市とも糸入縞類がその生産の主体をなしている。しかし、いずれの郡市でも明治末から大正期にかけて、生産額自体は伸びているものの、綿織物や毛織物の生産拡大に押されて、織物生産全体に占める割合は低下傾向にある。

第７表　愛知県の絹綿交織物生産額

年次	愛知県合計				
	合計	紋織類	繻子類	絲入縞類	その他
1895年	2,043,513	42,557	71,914	1,492,993	436,049
1899年	3,211,124	81,100	−	2,676,978	453,046
1904年	1,206,592	111,273	35	1,065,000	30,284
1909年	4,219,512	79,079	78,242	3,021,852	1,040,339
1914年	4,336,929	260,110	246,071	2,814,831	1,015,917
1919年	22,887,690	107,496	1,124,602	14,229,500	7,426,092
名古屋市					
1895年	…	…	…	…	…
1899年	196,799	−	−	57,576	139,223
1904年	…	…	…	…	…
1909年	990,422	18,655	78,242	265,911	627,614
1914年	585,856	73,128	21,071	458,251	33,406
1919年	4,630,706	16,185	506,470	2,737,339	1,370,712
愛知郡					
1895年	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…
1904年	…	…	…	…	…
1909年	67,563	2,811	−	48,836	15,916
1914年	157,857	8,701	−	35,415	113,741
1919年	1,287,901	6,426	−	902,951	378,524
葉栗郡					
1895年	…	…	…	…	…
1899年	575,888	49,994	−	273,867	432,027
1904年	…	…	…	…	…
1909年	436,748	57,613	−	98,743	280,392
1914年	912,532	61,278	−	87,891	763,363
1919年	3,970,294	−	−	2,463,656	1,506,638
中島郡					
1895年	…	…	…	…	…
1899年	2,326,488	31,106	−	2,245,002	50,380
1904年	…	…	…	…	…
1909年	2,582,764	−	−	2,472,706	110,058
1914年	2,308,119	107,427	−	2,103,184	97,508
1919年	11,847,954	84,735	358,400	7,476,782	3,937,037

注）単位は（円）。…は資料なし。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

d）綿織物

『愛知県統計書』類に記載をみる綿織物品目名は、1895年～1914年の間には、白木綿、岡木綿（1908年以降）、縞木綿、絣木綿、縮木綿、織色木綿、綿フランネル（綿ネル）、蚊帳地、小倉地類（1903年以降）、足袋底（1904年および1908年以降）、男帯地類、女帯地類、その他の13品目であるが、1902年以降、農商務省の織物指定特別調査による綿毛布、機械織広幅白綿布、タオル（1903年以降）が、綿織物とは別立てで掲載されている。1915年以降は、これら別立て3品目も綿織物に含まれるようになり、白木綿（小幅物、小項目として、岡木綿、其他白木綿）、同（広幅物、別表の「広幅綿布」の項目として、天竺布、粗布、綾金巾、金巾、その他）、縞木綿、絣木綿、縮木綿、織色木綿、綿フランネル、タオル、蚊帳地、綿毛布、袴地類、小倉地、足袋底、帯芯、男帯地類、女帯地類、ガーゼ、その他の18品目、小項目まで含めると、25品目が上げられている[15]。

綿織物生産額の動向を示した第８表、第９表では、生産額の多い主要６品目を上げ、それら以外の品目は一括して「その他」に含めている。1895年の愛知県全体の綿織物生産額は583万円で、同年の織物生産総額の73％を占め、他を圧倒しているが、品目的には小幅白木綿が綿織物の61.6％を占め主体となっている。これに次いで縞木綿が24.3％を占めて多い。その後10年間の、生産額の増加は比較的緩やかであったが、1904～05年頃から増加の速度が高まり、明治末から大正初期にかけては再び伸びが鈍るものの、1915年の落ち込み以降は、第１次世界大戦による好景気に支えられて、1919年にかけて生産額は飛躍的に上昇している。1904年には小幅白木綿の比率が65.2％まで上昇する一方、統計上広幅白綿布[16]や綿フランネル、綿毛布が出そろって、その比率を高め、逆に縞木綿は生産額が激減してその比率も著しく低下している。縞木綿は1900年以降じょじょにその生産額が減少してきたが、この年次のみ極端に少なく、翌年からは再び増加に転じている。広幅物では粗布、天竺布を主体に、金巾なども相当量生産されている。

織物生産の頂点に達した1919年には綿織物生産額が１億6,300万円に急増し、各品目とも増加が著しいが、とりわけ広幅白綿布類の急増が目につき、第１次世界大戦期の綿織物生産額の急増はもっぱら広幅物の増加に拠っているところ

第８表　愛知県尾張地域の綿織物生産額

年次	愛知県合計							
	合計	小幅白綿布	広幅白綿布	縞木綿	織色木綿	綿ネル	綿毛布	その他
1895年	5,832,265	3,594,039	…	1,418,415	－	7,178	…	812,633
1899年	8,156,752	5,198,111	…	1,646,360	332,017	55,539	…	931,303
1904年	9,177,506	5,983,162	516,070	604,160	467,782	474,844	401,237	730,251
1909年	18,890,502	9,844,144	1,200,818	2,161,266	147,241	477,933	165,971	3,569,129
1914年	22,360,224	10,718,106	4,829,534	2,373,801	1,327,075	356,807	103,729	3,027,096
1919年	163,172,949	39,387,515	84,600,601	14,798,457	3,783,326	967,567	2,294,173	17,341,310
名古屋市								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	356,045	－	…	60,323	－	24,389	…	273,703
1904年	2,095,789	526,977	516,070	－	－	－	372,985	679,757
1909年	2,931,346	241,475	888,897	135,484	10,010	151,190	162,707	1,341,583
1914年	3,158,163	723,707	1,302,579	100,378	358,081	79,884	53,729	539,805
1919年	34,802,343	326,050	25,043,843	313,415	51,107	840,270	2,218,961	6,008,697
愛知郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	31,949	11,728	－	－	－	－	－	20,221
1909年	693,514	93,711	46,260	42,713	677	305,732	960	203,461
1914年	1,126,731	228,838	420,613	92,277	2,329	222,773	－	159,901
1919年	17,957,629	2,596,397	13,253,682	843,429	457,419	23,662	－	783,040
西春日井郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	49,041	41,418	－	－	－	－	－	7,623
1909年	115,142	82,441	30,600	615	－	1,461	－	25
1914年	509,890	350,282	73,620	12,772	－	22,061	－	51,155
1919年	3,416,860	22,032	727,673	－	－	100,800	－	2,566,355
丹羽郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	595,076	339,110	－	－	－	－	1,800	254,166
1909年	1,681,422	1,882,774	29,051	62,122	43,382	－	1,200	162,723
1914年	1,480,538	961,081	－	79,889	187,596	－	－	251,972
1919年	4,918,323	261,660	3,444,105	597,879	1,303	－	－	613,376
中島郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	1,149,864	107,832	…	510,404	118,707	24,025	…	388,896
1904年	1,187,594	717,366	－	－	－	－	4,050	466,178
1909年	2,558,536	523,362	－	867,950	641,272	－	1,104	524,844
1914年	3,187,898	278,247	900	1,060,893	288,652	675	50,000	1,508,531
1919年	12,869,203	889,877	2,189,000	4,944,585	1,538,041	－	－	3,307,700
海部郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	422,363	77,176	－	－	－	－	－	345,187
1909年	1,297,777	194,223	－	354,875	574,116	－	－	174,563
1914年	423,863	221,409	－	41,318	103,108	－	－	58,028
1919年	4,076,038	177,290	399,930	1,538,776	－	－	－	1,960,042
知多郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	1,960,149	1,933,231	…	18,343	1,600	6,000	…	975
1904年	2,854,277	2,822,900	－	－	－	－	－	31,377
1909年	3,798,149	3,771,334	－	5,819	47	－	－	20,949
1914年	7,342,109	4,798,343	2,509,974	－	－	－	－	33,792
1919年	50,235,015	21,398,684	28,836,331	－	－	－	－	－

注）単位は（円）。…は資料なし。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

が大きい。同年の広幅白綿布の綿織物全体に占める比率は51.8%と過半に達し、小幅白木綿を金額で倍以上も上回っている。1914年からの５年間で、綿毛布は22.1倍、広幅白綿布は17.5倍の急増であったが、小幅白木綿は3.7倍と縞木綿の6.2倍よりも伸び率は低かった。綿織物全体としてみれば、1919年には広幅、小幅を合わせた白綿布類が生産額の75.9%を占め、縞木綿は大正期にじょじょに比率が低下して、9.1%を占めるに過ぎなくなっている。なお、『愛知県統計書』で1908年以降に品目名として登場する「岡木綿」は、小幅白木綿の一種で、栃木県の真岡木綿を模したものともされるが、一般の白木綿よりも多少高い価格で取引されるため、一定の生産量があり、小幅白木綿全体の１～２割程度の生産規模を有している。

地域的な特性を、まず尾張地方からみてみよう。第８表には1919年の綿織物生産額が300万円以上の郡市を上げているが、最大は知多郡の5,023万円、次いで名古屋市の3,480万円、以下、愛知郡の1,796万円、中島郡の1,287万円が主だった郡市である。一部郡市別のわかる1899年からみると、やはり知多郡が196万円と最も多く、中島郡の115万円がこれに次いでいる。知多郡はこの間一貫して綿織物で愛知県最大の生産額を上げているが、生産の中身はほぼ白綿布類に集中、特化しており、大正期に入る頃から広幅白綿布類の生産が急増するが、それまでは小幅白木綿生産が大部分を占め、品目的にはほかにみるべきものがほとんどない。

これに対して、名古屋市では広幅白綿布生産額が、統計に登場する1904年時点ですでに51万円と、白木綿の52万円に匹敵する生産規模を上げており、その後は低迷する白木綿に替わって、同市綿織物生産の中心になっている。1919年には綿織物生産の72%を同品目が占めている。ただし、知多郡とは異なって、縞木綿、織色木綿、綿フランネルなど多彩な品目の生産が行われており、さらに、綿毛布など特殊な品目が名古屋市に集中している。愛知郡や西春日井郡など、名古屋市に隣接する地域では、明治末頃から綿織物生産額が急増するが、名古屋市同様、広幅白綿布類がその生産の主体をなし、在来品目もある程度みられるものの、新興産地の趣が強い。名古屋市を中心としたこの地域は大規模な紡績資本による兼営織布が展開した地域であり、前述した神立春樹氏の指摘

（七一）

する広幅白綿布類主体の生産特性は、この地域特性を強く反映したものである。

他方、中島郡は尾張西部の中心的織物生産地であるが、綿織物生産の中心は縞木綿にあり、白綿布類の生産はあまり活発ではない。ただし、尾張地方のなかでは岡木綿生産の中心となっている。同様の傾向は近隣の丹羽郡や海部郡、葉栗郡でも認められ、この地域が絹綿交織物とともに、先染め糸を用いた在来の縞木綿生産地域であった特性を強く反映している。これは上述の名古屋市およびその周辺地域や知多郡、さらに後述する三河地方とも異なる尾張西部の地域特性である。

つぎに三河地方の特性をみておこう（第９表）。この地方は江戸期以来の三河木綿の産地として有名であるが、先述のように綿織物以外には有力な織物生産がなく、その綿織物生産も、統計の利用できる明治中期以降は、尾張地方の後塵を拝している。品目的には白木綿生産がその主体をなしてきたが、明治末から大正期にかけて、じょじょに白木綿の比率は低下し、尾張同様広幅白綿布の生産が増加している。白綿布類のうち、岡木綿生産が比較的盛んで、一般の白木綿と同等規模の生産額を示している。また、縞木綿や織色木綿の比率もむしろ高まる傾向を示し、1919年には白木綿を中心としながらも、多様な品目構成を示している。ただし、この点は以下の地域的な特性を反映した結果である。

地域的特性をみると、三河地方の綿織物生産は、三河湾に面した平野部の碧海郡、幡豆郡、額田郡、宝飯郡に集中しており、西加茂、東加茂、北設楽、南設楽、八名など、北部の丘陵・山間部ではあまり盛んではない。渥美郡では主として豊橋[17]とその周辺に生産が集中しているようである。1919年には上記主要４郡で三河地方の綿織物生産の95％を占め、４郡の合計額3,050万円で尾張地方の主要綿織物生産郡１郡の規模に匹敵している。ただし、４郡のうち、碧海、幡豆、額田３郡では生産がほぼ白綿布類に収斂しているのに対して、宝飯郡のみは白綿布類の生産規模が小さく、縞木綿および織色木綿に集中している。すなわち、三河の綿織物生産は明治後期から大正期にかけて、白綿布生産への収束を強める碧海、幡豆、額田３郡からなる西三河地域と、縞木綿、織色木綿に生産を集中させる宝飯郡（東三河地域）に峻別されるようになる。さらに東隣の渥美郡では豊橋を中心にして、生産規模は小さいものの、綿織物と並んで

第９表　三河地域の綿織物生産額

年次	三河地域							
	合計	小幅白綿布	広幅白綿布	縞木綿	織色木綿	綿ネル	綿毛布	その他
1895年	2,190,301	1,772,719	…	225,671	−	−	…	191,911
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	3,520,586	1,241,535	−	−	−	−	11,804	2,267,247
1909年	4,548,260	3,340,218	28,600	543,400	201,597	19,550	−	414,895
1914年	4,835,271	2,938,770	521,848	655,030	332,831	31,414	−	355,378
1919年	31,941,390	13,532,454	9,504,539	5,930,996	1,656,097	2,835	75,212	1,239,257
碧海郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	398,182	390,818	−	−	−	−	3,299	4,065
1909年	1,359,114	1,331,730	−	3,344	700	−	−	23,040
1914年	1,418,761	879,368	409,970	4,096	5,639	31,414	−	88,274
1919年	5,780,842	2,365,522	3,203,660	41,250	9,100	−	−	161,310
幡豆郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	387,510	347,380	−	−	−	−	8,505	31,625
1909年	1,692,910	1,408,764	−	36,064	19,814	−	−	228,268
1914年	793,740	655,791	−	28,725	18,175	−	−	91,049
1919年	4,993,202	2,474,562	2,335,840	45,632	4,600	−	−	132,568
額田郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	444,797	433,377	−	−	−	−	−	11,420
1909年	691,327	542,574	−	19,874	12,457	−	−	116,422
1914年	1,460,097	1,205,183	80,528	19,361	23,438	−	−	131,587
1919年	12,442,272	8,248,291	3,519,007	150,443	99,946	−	75,212	349,373
宝飯郡								
1895年	…	…	…	…	…	…	…	…
1899年	…	…	…	…	…	…	…	…
1904年	359,888	37,230	−	−	−	−	−	322,658
1909年	741,213	25,813	28,600	455,447	164,650	19,550	−	47,153
1914年	933,152	39,290	−	597,240	277,413	−	−	19,209
1919年	7,288,690	9,180	52,056	5,614,428	1,518,773	2,835	−	91,418

注）単位は（円）。…は資料なし。額田郡の1919年値には、1916年に市制施行した岡崎市の数値を含む。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

絹織物生産が一定程度展開しており、三河地方が東部と西部の間で織物生産の地域特性に差異を有することを示している。

e）毛織物ほか

『愛知県統計書』類で1899年から標目の上がる毛織物は、当初品目には分けられておらず、1901（明治34）年になって毛布（羅紗、フランネル、セル等）とその他の２項目が、1904年以降にフランネル、セル類、その他の３項目が表記される。さらに翌年からフランネルが消えて、膝肩掛類が加わり、1908年以降、モスリン、フランネル、セル、毛布、膝肩掛、その他の６項目となり、1916年からは羅紗が付加されて７項目となっている。これらのうち、愛知県の毛織物生産動向を示す第10表では、主要生産品目であるモスリン、フランネル、セル類、羅紗の４品目を掲げ、それら以外はその他に一括して示した。

明治後期から大正中期にかけての日本の毛織物生産は、東京府、大阪府、愛知県、兵庫県が主要生産府県であり、東京では千住製絨所が官営工場として、全国の毛織物生産の中心的役割を果たし、軍服などの大量生産を行っていた。大阪では毛斯倫（モスリン）紡織など服地生産を行う大阪市およびその周辺部の大企業と毛布生産に特化した泉大津の中小企業群があり、兵庫には加古川を中心に日本毛織の製造拠点があった。これらに対して、愛知県では地場の中小企業を主体とした服地生産が展開するようになり、他府県のような主導的企業や工場が生産をリードする生産構造にはならなかった[18]。

1899年の毛織物生産額はわずか2,950円とどまるが、1904年には５万円（ただし、前年は18万円）、1909年には45万円と急拡大し、品目的にはセル地（サージ）が中心となり、1919年には毛織物総額4,543万円のうち、80.6%がセル地で占められている。大正中期頃になると、フランネルや羅紗、モスリンなど、生産品目の多様化もみられるが、セル地中心の基本的特性に変化はない。

地域的な特徴をみると、統計上、当初名古屋市から始まった毛織物生産は、すぐに中島郡や海部郡（当時は海東郡）でも展開するようになり、名古屋市と尾張西部の中島・海部２郡が毛織物生産の中心となっている。ただし、愛知県における毛織物生産がどこで最初に行われ始めたのかは、統計数値の上だけでは判断できない。名古屋市ではセル地を中心としながらも、綿織物に含まれる

第10表　愛知県の毛織物生産額

年次	愛知県合計					
	合計	モスリン	フランネル	セル類	羅紗	その他
1899年	2,950	…	…	…	…	…
1904年	54,816	…	1,350	28,481	…	24,985
1909年	455,848	37,809	10,484	385,100	…	22,455
1914年	3,116,614	147,381	−	2,538,591	…	430,642
1919年	45,428,991	37,800	1,821,715	36,618,037	4,016,233	2,935,206
名古屋市						
1899年	2,950	…	…	…	…	…
1904年	13,623	…	−	−	…	13,623
1909年	171,077	−	3,477	154,086	…	13,514
1914年	1,049,880	147,381	−	646,273	…	256,226
1919年	4,236,264	−	−	2,456,367	−	1,779,897
愛知郡						
1899年	−	…	…	…	…	…
1904年	2,700	…	1,350	1,350	…	−
1909年	−	−	−	−	…	−
1914年	51,449	−	−	51,449	…	−
1919年	739,042	37,800	105,552	530,246	−	65,444
西春日井郡						
1899年	−	…	…	…	…	…
1904年	−	…	−	−	…	−
1909年	36,450	36,450	−	−	…	−
1914年	477,713	−	−	303,297	…	174,416
1919年	2,949,715	−	202,800	2,362,856	−	384,059
中島郡						
1899年	−	…	…	…	…	…
1904年	11,362	…	−	−	…	11,362
1909年	90,999	−	−	90,999	…	−
1914年	971,010	−	−	971,010	…	−
1919年	16,529,209	−	1,506,475	13,121,634	1,196,704	704,396
海部郡						
1899年	−	…	…	…	…	…
1904年	27,131	…	−	27,131	…	−
1909年	141,505	−	−	139,755	…	1,750
1914年	557,700	−	−	557,700	…	−
1919年	20,464,347	−	6,888	18,044,130	2,413,329	−

注）単位は（円）。…は資料なし。
資料）『愛知県統計書』、『愛知県勧業年報』より

綿毛布の生産が愛知県内では盛んな場所で、その他に含まれる種々の毛織物製品が生産されている。中島郡と海部郡は明治末頃から毛織物生産が急増し、大正中期には羅紗やフランネルの生産もみられるものの、セル地生産が県内でも最も盛んな地域である。この地域における毛織物生産の増加は、ちょうど絹綿交織物生産の停滞や比率低下と表裏の関係を示している。

他方、愛知郡や西春日井郡では明治末ないしは大正初め頃から生産が活発化しだし、やはりセル地を主体に生産が盛んとなるが、1921年の一部町村の名古屋市への編入によって、見かけ上、両郡での生産が皆無となるため、事実上は名古屋での毛織物生産が周辺の郡部へ展開した結果とみてよいだろう。これら以外にも、葉栗郡では中島郡などと同様、明治中期からセル地を中心とした生産が行われてきているし、大正中頃になって、知多郡でも羅紗を中心とした毛織物生産がみられるようになる。しかし、三河地方では、豊橋市や岡崎市で散発的に統計表に毛織物生産が記載されることはあるものの、その生産はほとんど皆無といってよく、綿織物生産への収斂傾向が強い。

毛織物以外に、愛知県内ではわずかながら、麻織物、雑織物(織物雑類)、緞通(敷物)なども生産されている。表には掲げないが、名古屋市ではリボンなどの細幅織物やわずかではあるが緞通製造も行われている。麻織物も特定品目への特化はみられず、名古屋市や丹羽郡、海部郡など尾張地方と、碧海郡や宝飯郡など三河地方の一部で散在する形での細々とした生産がみられる程度である。

4．まとめ

本稿では明治大正期における愛知県での織物生産状況を、『愛知県統計書』類に依拠しながら分析してきた。以下にその要点をまとめておこう。

これまでの検討から、明治大正期における愛知県内の織物生産は、地域的にいくつかの類型に分けられることが明らかとなった。大まかには尾張地方と三河地方は異なる織物地域の類型をなしている。さらに尾張地方の中では、名古屋およびその周辺部(愛知郡、西春日井郡、東春日井郡)、尾張西部(丹羽郡、葉栗郡、中島郡、海部郡)、知多郡の3織物地域に分けてみることができる。三

河地方では、碧海郡、幡豆郡、額田郡、宝飯郡が三河平野の中でひとまとまりの織物生産地域を構成するが、より子細にみれば、碧海・幡豆・額田の西三河３郡と宝飯郡（東三河）との間には地域的な動向の違いが認められる。これらの地域区分に沿いながら、それぞれの地域の特性を整理すると以下のようになろう。

まず、名古屋およびその周辺部は、名古屋市を中心に、明治後期以降に展開する大規模紡績工場による兼営織布が、広幅白綿布類の生産を軸に綿織物生産地域を形成している。と同時に在来の絹織物、絹綿交織物生産も一定の集積をみており、工場生産とともに家内工業や賃織生産も多く残存して、小規模生産と動力化の遅れが大規模工場の機械生産と同居している。さらに、毛織物生産も在来の小規模生産と一定規模での工場生産が、周辺の郡部まで含めて展開している。

つぎに尾張西部は、中島郡を中心に絹綿交織物と縞木綿主体の綿織物生産が在来の機業地に展開していたところへ、明治後期以降、毛織物生産が導入され、大正期に入ると毛織物生産が絹綿や綿織物生産を凌駕し、毛織物生産地域へと変貌していく地域である。ここでは工場生産も展開するが、旧来からの織元－賃織業の生産関係が継続し、無動力の小零細生産者による織物生産が、明治大正期にはなお多く残存している。力織機の導入が進まない背景として、技術的には絹綿、綿とも縞類が生産の中心で、縞柄の織り出しが手織機に頼らざるをえかった点や農村地域の社会経済的状況が影響していたことが考えられるが、こうした点は今後の検討課題である。技術的な背景としてはこのことと中島郡を中心に大正期に足踏機が普及したことの間にも関連があると思われる。

さらに知多郡は、ここも古くからの「知多木綿」生産地域であるが、ほぼ白木綿に特化した生産が行われ、明治末から大正期にかけて、急速な力織機の普及によって工場制生産がいち早く展開し、愛知県内最大の綿織物生産地域となった。大正後期になって毛織物生産が入ってはくるものの、ほぼ綿織物生産、なかでも小幅白木綿と明治末から展開する広幅白綿布類の生産が圧倒的大部分を占めている。

最後に三河地方をみると、古くからの「三河木綿」産地であり、矢作川流域など、西三河の平野部を中心に綿織物生産が盛んな地域であったが、明治大正

（六五）

期には尾張地方の生産規模に圧倒された状況となっている。それでも碧海郡、幡豆郡、額田郡を中心に小幅白木綿生産が展開し、大正期には力織機の導入も進んで、工場制生産の導入は尾張地方以上に進んでいる。ただし、同じ三河でも東三河の宝飯郡では縞木綿生産が盛んで、白木綿中心の西三河地域とは異なった品目への特化がみられる。これら互いに隣接する３～４郡での綿織物生産をひとまとめしてみれば、尾張地方の有力織物生産郡１郡の生産規模に匹敵するため、産地として決して無視することはできない。

以上のように、愛知県は、尾張３地域、三河１地域の性格の異なる織物生産地域から構成されており、とりわけ、尾張地方の３地域構成は、あたかも、大阪府における大阪市およびその周辺部と、河内地方、和泉地方の３地域類型に対応するかの如くである。大阪府では大阪市およびその周辺部が紡績資本による大規模な兼営織布の展開や毛織物生産の展開、河内地方が縞木綿や織色木綿を主体とした在来の「河内木綿」産地、和泉地方が白木綿主体の綿工業地域と特徴付けられるが、名古屋市と大阪市、尾張西部と河内、知多郡と和泉の対応が思い浮かぶ。しかし、河内地方は明治大正期以降、織物産地としての特性を急速に喪失し、機械金属工業、雑貨工業など都市的工業生産地域へと変貌していったが、尾張西部の場合、日本を代表する毛織物工業地域へと発展していくことになった。むしろ、三河地方が織物生産の停滞するなかで、戦後自動車関連の工業集積を進めていった点を勘案すれば、河内地方との対応を三河地方に求めた方がよいかもしれない。これらの諸点の検討は、いずれも今後の課題であり、さらに『工場通覧』をはじめとする個別工場一覧の分析によって、織物工場のより詳細で具体的な展開状況を明らかにし、郡市別ではなく、市区町村、大字別の工場展開を捉え、織物生産における近代工業化の地域的実相に迫る課題が残されている。

なお、本稿の作成にあたっては、資料収集に際して平成22年度の愛知県立大学学長特別研究費を使用した。ご協力いただいた関係各位に感謝します。

注

１）中島　茂（2001）『綿工業地域の形成』、大明堂
２）同上(1989)「大正期大阪府下綿織物工場の分布特性」『賢明女子学院短期大学研究紀要』24、pp.43

－59

3）『農商務統計表』は第１次（1886〔明治19〕年刊、内容は1884年分）～第40次（1925〔大正14〕年刊、内容は1923年分）の刊行で、初期のものについては、収録府県や資料の遺漏も多く、末尾至行（1966）によって問題点も指摘されている。1925年の省庁改編によって、農商務省は農林省と商工省に分けられたため、本統計は第40次で終了し、翌年以降の工業に関する統計は『商工省統計表』に受け継がれた。末尾至行（1966）「初期『農商務統計表』の工場統計　―その解題とその分析―」『人文地理』18－４。

4）松田芳郎編（1980）『明治期府県の総括統計書解題―「勧業年報」によるデータベース編成事業報告書⑴―』、一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター

5）上掲書ならびに中島（2001）前掲書参照。

6）同年の『愛知県勧業年報』冒頭１～２頁の凡例には、「一従来本県ニ於テハ愛知県勧業雑誌ナルモノヲ編纂シ農商工水産及山林等ニ関スル事項ハ郡市町村ヨリノ諸統計表及諸報告類ハ勿論斯業ニ係ル諸講話筆記等洽ク叙述シ以テ地方当任者ニ頒布セリ是レ随時印刷セシヲ以テ事実ヲ神速ニ通報シ得ラル丶ノ便アリシト雖氏一年度内ニ於ル勧業上ノ統計ヲ得ンニハ一定ノ季限ニ拠ラザル可カラズ是レ本書ノ編纂アル所以ナリ」とあり、1894（明治27）年以前に『年報』の刊行があったのかどうかは疑問である。

7）『明治四十年愛知県統計書』冒頭の凡例には「一従来県治一班、学事年報、勧業年報、警察統計書及衛生年報ヲ発刊セシモ本年以降ハ之ヲ廃止シ代フルニ統計書ヲ発行スルコト丶ナレリ」とあり、前年で『愛知県勧業年報』の刊行が終了したことがわかる。

8）『愛知県治一班』は第１回が1895年版として刊行され、1900（明治33）年、01年、03年分を除いてほぼ毎年刊行されている。

9）岡崎市は、1916（大正５）年に額田郡の旧岡崎町が市制施行したものである。

10）神立春樹（1974）『明治期農村織物業の展開』、東京大学出版会、p.23

11）上掲書、pp.39－44。

12）中島（2001）前掲書、pp.50－53。

13）海部郡は1913年に海東郡と海西郡が統合されて成立した郡である。本稿では煩雑さを避けるため、本論中、表中を含めて、1912年以前の数値や表記についても海東、海西を集計し、海部郡の名称を用いている。

14）1921（大正10）年８月には名古屋市に近接した愛知郡の一部３町８村と西春日井郡の一部２町３村が名古屋市に編入合併され、同年以降の両郡の織物生産は、毛織物に限らず機業戸数、生産額とも見かけ上、激減しほとんど姿を消している。

15）綿フランネル（略称、綿ネル）は、『愛知県統計書』類では1914年までは数量単位が「反」となっているが、1915年以降は「碼（ヤード）」で表されている。綿フランネルは、もちろん小幅物がないわけではないが、一般的には洋服地として広幅物であることが多く、広い意味では広幅綿布に含めてもよいが、ここでは原表の記載通りに別物として取り上げている。なお、「小倉織」は1915年以降の『大阪府統計書』では「服地小倉」として「小幅白綿布類」の小項目に組み込まれているが、ここでは小幅白綿布には含めず、「その他」に合算している。

16）ここでいう「広幅白綿布」は、『愛知県統計書』の原表に従えば、「白木綿（広幅物）」と表記すべきであるが、「白木綿」自体が小幅白綿布類の代表的品目名であり、原表でも「織物指定特別調査」の欄では「機械織広幅白綿布類」（1915年以降は「広幅綿布」と表記）の用語を使用しているため、本稿では「広幅白綿布」と表記する。

17）豊橋市は1906（明治39）年に渥美郡の旧豊橋町が周辺２村（豊岡村、花田村）を統合して市制施行したものである。

18）日本毛織は愛知県内にも一宮や弥富に製造拠点を有したが、これは戦時中の1942年に地場の昭和毛糸紡績を買収合併したものである。